

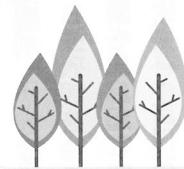
生きる意味  
生きるから

## “老い”を どう生きるのか

第18回

花園大学

はし もと かず あき  
橋本和明



筆者は前回の原稿で、「終わり」は決して悪いものではなく、終わりがあるから救われると述べた。さまざまな物事、あるいは人生には必ず終わりがあり、そこにネガティブな価値観を投与する必要はなく、ポジティブなものとして受け入れていく姿勢こそ、この終わりが生かされるのである。では、その終わりを受け入れる「老い」とはどのようなものなのか。そこで、老いについて書かれた仙厓義梵和尚の『老人六歌仙』を取り上げたい。

仙厓和尚は、寛延三年（一七五〇年）に生まれ、天保八年（一八三七年）に亡くなつた江戸時代の臨済宗妙心寺派の禅僧である。駿河の白隱、越後の良寛と並んで、博多の仙厓と呼ばれ、その禅画はあまりにも有名であ

る。その和尚の『老人六歌仙』にはこう記されている。

「しわがよる、ほくろができる、腰曲がる、頭がはげる、ひげ白くなる。手は震う、足は

よろつく、歯は抜け、耳は聞こえず、目は

疎くなる。身に添うは、頭巾、襟巻、杖、眼

鏡、たんぽ、おんじやく、しゅびん、孫の

手。聞きたがる、死にともながる、淋しが

る、心は曲がる、欲深くなる。くどくなる、

気短かになる、愚痴になる、出しやばりたが

る、世話焼きたがる。またしても、同じ話に子を誉める、達者自慢に人は嫌がる。」

こうみると、老人になつていくことは何もいいことがなく、「年は取りたくないものだ」と嘆くのも無理はない。成年であれば、体力

も気力も想像力もあり、社会の労働力や生産力となつて貢献できるが、老人はそうはいかない。もはや役立たずと言われるしかないのだろうか？

筆者がある男性のクライエントのカウンセリングをしていた時のことである。そのクライエントは職場で不適応となり、家庭でも妻との折り合いが悪くなつて、生きる望みをなくしていた。毎回毎回、筆者との面接で「死にたい」との言葉を繰り返し、ある時は遺書まで残して死に場所を探して放浪したこともある。しかし、最後に彼の死を思い止めたのは、彼の父親の存在であった。父親はすでに高齢であり、しかも認知症となつていて老人ホームに入所していた。その老人は

5

息子であるクライエントが見舞いに来ても、息子であることすらわからない状態であった。クライエントにすると、老齢の父親は心理的な重荷にこそなつても、頼れる存在ではなかつた。しかし、クライエントが自死を考え彷徨つていた時に、彼はふと父親のことを思い浮かべ、「父親を残し、父親よりも早く自分が死ぬわけにはいかない」と考え直したそうである。これはどういうことかと考えると、父親がいるということ 자체が彼の死を思い止めたのである。

筆者は、そんなケースを思い起こしながら、老人の役割といふのはそんなところにあるのではないかとふと思つたりする。つまり、「存在すること」、「いること」に非常に大きく自分が死ぬわけにはいかない」と考え直したそうである。これはどういうことかと考えると、父親がいるということ 자체が彼の死を思ふのを止めたのである。

ようすると、逆に人に嫌われてしまう。しかし、人のお役に今さら立たなくとも、そこに「いること」が老人の役割とみてはどうだろうか。年のいかれた老人の方が「人様にご迷惑ばかりをおかけするので、早くお迎えに来てほしい」と口にされるが、何もせずっとも長生きすることこそ意味がある。

先の仙厓和尚について、臨終のときの逸話が残つてゐる。和尚がいよいよ亡くなる時、枕元に集まつた弟子達は大切な言葉を和尚が遺されると考えた。すると、和尚はなんと言つたかというと、「死にとうない、死にとうない」と口にしたのである。弟子達はもう少し氣の利いた言葉を期待したがそうではなかつた。しかし、果たして真意はどうだつたのか

きな役割がある。すでに体も衰え、認知機能も低下し、何かを積極的にすることはもはや難しいかもしない。しかし、生きていること、あるいはそこにいること 자체に意味がある。別の言い方をするならば、"being"、が老人の大きな役割であると考えてもいいのかもしれない。

得てしてわれわれは物事の効率化や生産性ばかりに目を奪われ、「すること」、「やること」といった "doing" に注目しがちである。そのため、『老人六歌仙』にあるように、歯は抜け、耳は聞こえず、目は見にくくなつてくると、自分のことすらできなくなつてくる。しかも、欲深くなつたり、出しゃばつたりして、老いても "doing" をし

だろうか。筆者が考えるに、弟子達はこの時に及んでも、和尚に何かをしてもらえるとの "doing" を求めていたのではなかろうか。「死にとうない」という言葉が、"being" を意味する言葉だと受け止める必要があつたのではないだろうか。つまり、和尚の生への未練がましい言葉というのではなく、臨終に及んでもこの世に生き続けようとする和尚の生き様ではなかつただろうか。

〔文献〕『死にとうない』堀和久著、新潮文庫、

一九九六

橋本和明  
大学を卒業後、二十年以上も家庭裁判所で調査官として勤務し、少年事件や家事事件などの非行や虐待などの臨床心理士として活動してきた。二〇〇六年から花園大学に奉職。臨